



## 「平城宮跡第一次大極殿院東楼復原整備工事」見学会

公益社団法人 日本建築積算協会 関西支部

積女 ASSAL かんさい 寺浦 加津



令和7年1月23日(木)、国土交通省近畿地方整備局が主催されている「平城宮跡第一次大極殿院東楼復原整備工事」の見学会に参加させて頂きました。参加者はご新規の方を含め25名、天候は、前週の寒い日とは違って変わり温かく快晴の見学会日和でした。近鉄奈良線大和西大寺駅から町中を20分程度歩くと一変して平城宮跡のゆったりした空間の中で復原工事が行われていました。

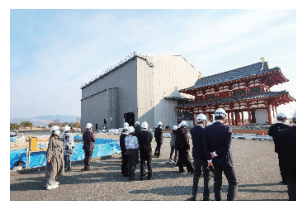
まず、手前の復原事業情報館に展示されている古代建築に使われた道具類を見せて頂き、現場事務所で事業と工事の概要のご説明をして頂きました。



その後、加工場では実際、宮大工さんたちが作業されている現場で、図面や屋根の模型、瓦のサンプルなどを手に取って、手斧（ちょうな）、ヤリガンナなど伝統道具類をどの様に使うかの説明を受け、復原工事はまさに伝統技能の継承だと感じました。木材は、乾燥による割れがあっても中の組織が密に絡まっているので構造的に問題ないと聞き驚きました。



工事は天候に左右されず安全に効率よく進める環境を確保するため素屋根が掛けられ、内部に足場を組んで作業が進められていました。この素屋根は南門復原工事に使用していたもので、水平ジャッキを用いて約1ヶ月半かけて東へ移動させ、その後は西楼復原工事に使われるそうです。



東楼の外周の柱は通柱となっており約12mと、とても長く清水の舞台とほぼ同じ高さで復原建造物では最大級の長さとの事です。木材は主に紀伊山地で調達し、樹齢200年以上の吉野檜をはじめ最高品質の木材が使われています。



奈良時代の建物なので、現代の建築基準法では安全性確保のため補強が必要で、原型の意匠を損なわないよう最小限で、取外すことが出来るよう考えられており、復原材とは区別できるよう黒い鉄骨フレームを入れていました。ご説明頂いた近畿地方整備局の上田室長も仰っていましたが、復原工事はまさに伝統技能の継承ではありますが、どのように

復原するかその難しさを感じました。

今まで復原工事の積算の経験はないですが、実際の現場を見せて頂き、基礎工事、木工事、瓦、金物、左官、塗装に至る作業の、一つ一つに思いを込められた伝統建築の味わい深さを知り、とても興味深かったです。今回お世話になりました近畿地方整備局京都営繕事務所上田室長をはじめ、竹中工務店の作業所の皆様ありがとうございました。

